



## 2020年度 第2回 対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構  
水産資源研究所がとりまとめた結果 －

### 今後の見通し(2021年4月～9月)のポイント

#### 海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域は、「屋久島南付近での変動」もしくは「接岸傾向」で経過する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表面水温は、概ね「やや高め」で経過する。

※引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「やや」 : 約3年に1回程度の発生頻度

#### 漁況(来遊水準)

- (1) マアジは前年並み。
- (2) マサバは前年並み。
- (3) ゴマサバは前年並み。
- (4) マイワシは前年並みで、平年を上回る。
- (5) ウルメイワシは前年並みで、平年を下回る。
- (6) カタクチイワシは前年を上回り、前年並み。

※「前年」は2020年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。

### 問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当：管理部門 薄、清本

漁況：浮魚資源部 大下、黒田

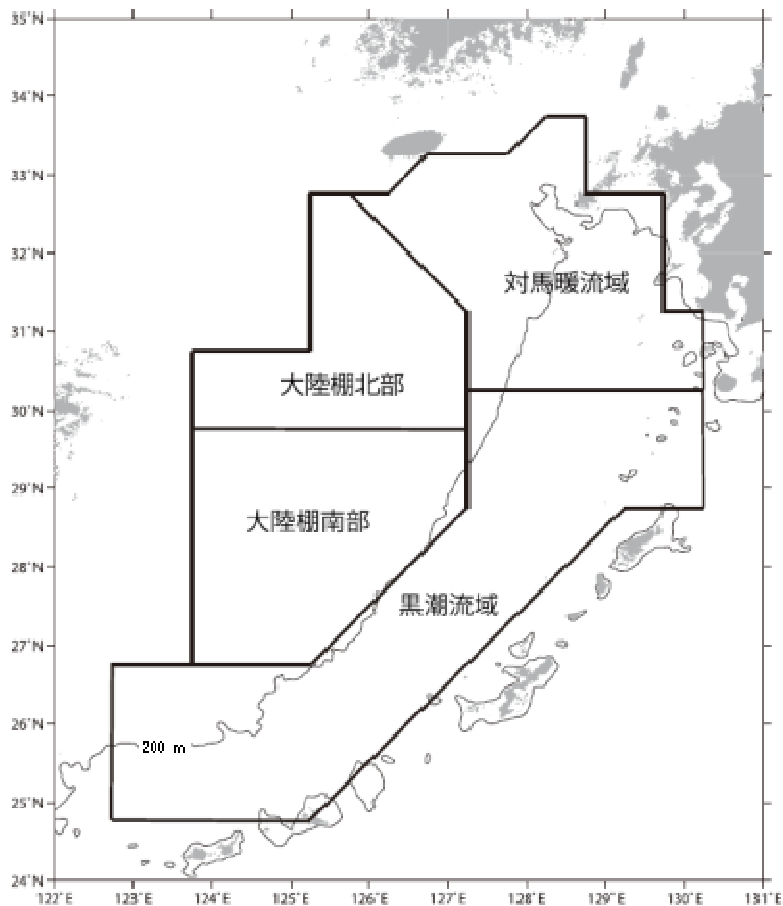
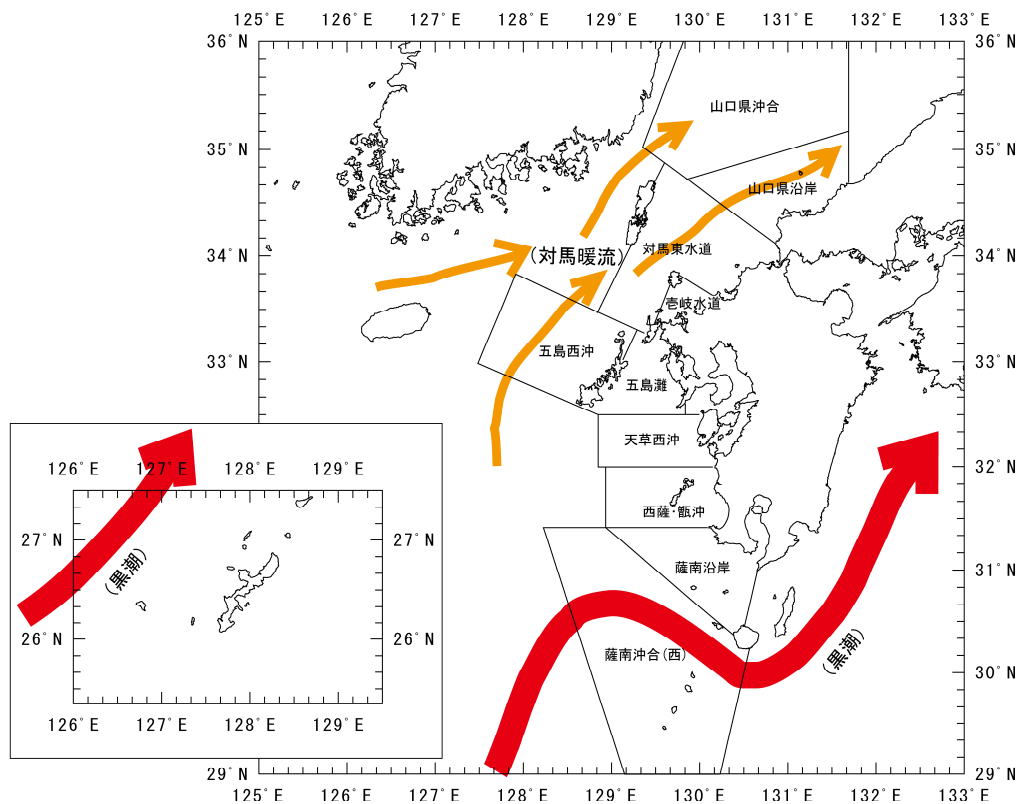
海況：海洋環境部 渡邊、種子田

電話：095-860-1600、ファックス：095-850-7677

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/>

# 予報対象海域



## 西海ブロック海況予報

### 1. 今後の見通し（2021年4月～9月）

#### (1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、短期的な南北移動を繰り返すが、「屋久島南付近での変動」もしくは「接岸傾向」で経過する。

#### (2) 表層水温

山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、大陸棚上、黒潮流域は「やや高め」、西薩・甑沖、薩南沿岸、薩南沖合、沖縄島周辺海域は「平年並み～やや高め」で経過する。

### 2. 経過（2020年10月～2021年3月）

#### 1. 大陸棚上

##### (1) 海面水温

北部：10・11月「平年並み」、12月「やや高め」、1月「平年並み」、2月「やや高め」。

南部：10月～12月「やや高め」、1月「平年並み」、2月「かなり高め」。

#### 2. 黒潮流域

##### (1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、10月～1月は「接岸傾向」、2月は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」で経過。

##### (2) 海面水温

10月～12月「やや高め」、1月「やや低め」、2月「やや高め」。

#### 3. 対馬暖流域・沿岸域

##### (1) 表層水温

山口県沖合：10月「やや低め」、11月「平年並み」、12月「はなはだ高め」、1・2月「平年並み」。

山口県沿岸：10月「かなり低め」、11月「平年並み」、12月「かなり高め」、1月「平年並み」、2月「やや高め」。

対馬東水道：10月「やや低め」、11月「平年並み」、12月「かなり高め」、1月～3月「やや高め」。

壱岐水道：10・11月「平年並み」、2月「かなり高め」、3月「やや高め」。

五島西沖：11月「平年並み」、2月「やや高め」。

五島灘：11・2・3月「やや高め」。

天草西沖：1月「平年並み」、3月「かなり高め」。

西薩・甑沖：1月「平年並み」、3月「やや高め」。

薩南沿岸：11月「やや高め」、1・3月「平年並み」。

薩南沖合：11月「かなり高め」、1・3月「平年並み」。

沖縄島南東：10・11月「かなり高め」、3月「やや高め」。

沖縄島南西：10・11・3月「やや高め」。

##### (2) 表層塩分

山口県沖合：10・11月「平年並み」、12月「やや低め」、1・2月「平年並み」。

山口県沿岸：10月「平年並み」、11・12月「やや低め」、1・2月「やや高め」。

対馬東水道：10月「かなり低め」、11・12月「平年並み」、1月～3月「やや高め」。

壱岐水道：10・11月「平年並み」、2・3月「やや高め」。

五島西沖：11月「かなり高め」、2月「やや高め」。

五島灘：11月「かなり高め」、2・3月「平年並み」。

天草西沖：1月「平年並み」、3月「やや高め」。

西薩・甑沖：1・3月「平年並み」。

薩南沿岸：11月「やや高め」、1月「やや低め」、3月「平年並み」。

薩南沖合：11月「やや高め」、1・3月「平年並み」。

沖縄島南東：10・11・3月「平年並み」。

沖縄島南西 : 10月「やや高め」、11・3月「平年並み」。

### 3. 現況 (2021年3月中旬)

#### (1) 大陸棚上

海面水温は北部「やや高め」、南部「はなはだ高め」。

#### (2) 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」。海面水温は「かなり高め」。

#### (3) 対馬暖流域

海面水温は「かなり高め」。

(注) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」 : 約22年に1回程度の発生頻度

「かなり」 : 約7年に1回程度の発生頻度

「やや」 : 約3年に1回程度の発生頻度

「平年並み」 : 約2年に1回程度の発生頻度

# 東シナ海～日本海西南域マアジ・さば類・いわし類長期漁況予報

今後の見通し（2021年4月～9月）

対象海域：東シナ海～日本海西南海域

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2021年級群（2021年生まれ））、1歳魚（2020年級群）、2歳魚（2019年級群）。  
魚の大きさは、マアジ・さば類は尾叉長、いわし類は被鱗体長で表示。

## 1. マアジ

(1) 来遊量：前年並み。沖合域の漁況は前年並みで、沿岸域の漁況は前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、対馬沖、東シナ海中・南部、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：15～25cmの1歳魚（ゼンゴ・小銘柄）が主に、5～15cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と25cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

## 2. マサバ

(1) 来遊量：前年並み。沖合域の漁況は前年並みで、沿岸域の漁況は前年を下回り、平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、対馬沖、東シナ海中・南部、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は26～31cmの1歳魚（豆・小銘柄）と32cm以上の2歳魚（小・中銘柄）が、漁期後半はさらに15～25cmの0歳魚（豆銘柄）が主に漁獲される。

## 3. ゴマサバ

(1) 来遊量：前年並み。沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中・南部、鹿児島県の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：沖合域では15～28cmの0歳魚（豆銘柄）と28～32cmの1歳魚（豆・小銘柄）が主に漁獲される。沿岸域では35cm前後の1～3歳魚（小～中銘柄）が主に漁獲される。

## 4. マイワシ

(1) 来遊量：前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：漁期の後半に長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は15～19cmの1歳魚（中羽・大羽銘柄）と2歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が、漁期後半は15cm以下の0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主に漁獲される。

## 5. ウルメイワシ

(1) 来遊量：前年並みで、平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：漁期の後半が主体となる。長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は15cm以上の1・2歳魚（中羽・大羽銘柄）が、漁期後半は5～15cmの0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主に漁獲される。

## 6. カタクチイワシ

(1) 来遊量：前年を上回り、平年並み。

(2) 漁期・漁場：5月～8月が漁期の主体で、山口県及び長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は8cm以上の0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）に5～8cmの0歳魚（小羽銘柄）が混じり、漁期後半から4～10cmの0歳魚（カエリ～中羽銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2020年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。  
沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

## 漁況の経過（2020年10月～2021年1月）および見通しについての説明

### 1. 資源状態

#### (1) マアジ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準にあったが、1980・1990年代前半に増加し、1993年～1998年には50万トンを超えた。その後、資源量は減少し、1999年～2002年には30万～40万トンだったが、2003年、2004年には増加し、再び50万トンを超えた。2005年以降は40万トン前後で推移している。

東シナ海・日本海（青森県～鹿児島県）での我が国のマアジ漁獲量は、1973年～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980・1990年代は増加傾向を示し、1993年～1998年には20万トンを超えたが、1999年～2002年は14万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンだった。2006年以降はほぼ横ばいであったが、2019年は8万トンと2018年に引き続き10万トンを下回った。

#### (2) マサバ対馬暖流系群

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970年代から1990年代半ばまで、100万トン前後で比較的安定していたが、その後増減を繰り返し2000年以降は50万トン前後に留まっている。近年では、資源量は2013年に過去最低の37万トンを記録して以降、2018年に68万トンまで回復したが、2019年は45万トンに減少した。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半は30万トン前後であったが、1990年代初めに15万トンほどに落ち込んだ。その後、1996年に41万トンまで増加したが、2000年以降、概ね8万～12万トンの低い水準で推移している。近年の漁獲量は、2013年以降増加にあったが、2019年は前年（15万トン）より減少し、10万トンだった。

#### (3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に生息するゴマサバの資源量は、1992年以降、比較的安定しており、10万～20万トン程度で推移している。近年では、2015年以降、増加傾向にあり、2018年の資源量は21万トンであったが、2019年は11万トンに減少した。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1970年代以降およそ5万トン前後で推移している。近年では2011年の4万9千トンピークに減少傾向にあり、2018年にやや増加したものの、2019年は1973年以降で最低の2万2千トンであった。

#### (4) マイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、1980年代にかけて高い水準にあった。しかし、1990年代に急激に減少し、2001年～2003年には過去最低水準となった。その後、資源量は2004年～2012年には増加が続き、2013年以降も変動しながら増加傾向にある。

東シナ海・日本海での我が国のマイワシの漁獲量は、1983年～1991年には100万トン以上と多かった。その後、急激に減少し、2001年～2003年の漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年から漁獲量は増加傾向となり、2011年に急激に増加して4万3千トンとなった。その後は横ばい傾向にあったが、2019年は前年の7万1千トンから急減して1万4千トンであった。

### (5) ウルメイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するウルメイワシの資源量は増減を繰り返しながら推移している。近年では2003年以降は増加傾向にあり、2015年には14万トンまで増加したが、その後減少が続き、2019年は9万トンとなった。

東シナ海・日本海での我が国のウルメイワシの漁獲量は、1976年～1998年には2万トンを超えていた。特に1980年代後半から1990年代前半までは4万トンを上回る年が多くみられた。しかし、1990年代後半から2000年には1万トンまで減少した。2001年以降、漁獲量は増加傾向にあり、2013年と2016年には5万トンを超えた。その後漁獲量は減少し、2017年以降は3万～4万トンの範囲で変動しており、2019年は3万5千トンだった。

### (6) カタクチイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するカタクチイワシの資源量は、1990年代に増加し、1998年には30万6千トンに達したが、2001年には13万トンまで減少した。資源量は2007年には24万7千トンとなったが、その後減少傾向にあり、2019年には10万4千トンとなった。

東シナ海・日本海における我が国のカタクチイワシの漁獲量は、1997年を除いて1996年～2000年には10万トンを超えていたが、2001年に急減し、2004年には6万1千トンまで減少した。漁獲量はその後、2008年にかけて9万7千トンまで増加したが、2009年に減少し、それ以降4万4千トン～6万6千トンの範囲で推移している。近年の漁獲量は2016年以降減少傾向にあったが、2019年は5万4千トンと前年より9千トン増加した。

## 2. 漁況の経過

2020年11月～2021年1月の大中型まき網漁業の漁場は、対馬沖が主体であったが、例年に比べて、五島灘・薩南、東シナ海中部などでの操業も多かった。この期間における大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計1万4千トンで前年(2019年11月～2020年1月、1万2千トン)を上回った。マアジは4千トンで前年(5千トン)を下回り、さば類は9千トンで前年(5千トン)を上回った。

2020年11月～2021年1月の山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1の通りである。マアジの漁獲量は海域によって差があるが、全体としては前年・平年を上回った。漁獲の主体は17～25cmの1歳魚と17cm以下の0歳魚であった。マサバは、前年を上回り、平年並みであった。漁獲の主体は20～28cmの0歳魚と28～35cmの1・2歳魚であった。ゴマサバは、前年を上回り、平年並みであった。漁獲の主体は25～40cmの0～3歳魚であった。マイワシは、前年を上回り、平年並みで、漁獲の主体は0歳魚であった。ウルメイワシは、前年並みで、平年を下回った。15～20cmの0・1歳魚を主体に20cm以上の1・2歳魚も漁獲された。カタクチイワシは、前年並みで、平年を下回った。漁獲の主体は10cm未満の0歳魚であった。

## 3. 今後の見通しの説明

### (1) マアジ

例年、4月～9月期には1歳魚(ゼンゴ・小銘柄)が漁獲の主体で、0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)、2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。各年級群の資源状態はこれまでの漁況や調査船調査などの結果から、2019年級群の豊度は2018年級群並みで、2020年級群の豊度は2019年級群並みとみられる。2021年級群の豊度を予測するのは難しいが、東シナ海における着底稚魚の分布量(0歳魚の資源量指標値の一つとなっている)と高い相関が見られる4月半ばの好適水温帯面積\*は、2021年(予測値)は2020年並みと見込まれるため、2021年級群の豊度は2020年級群並みと考えられる。全体の来遊量は前年並みと考えられる。

来遊量と直近までの漁獲状況を反映して、沖合域の漁況は、前年並み、沿岸域の漁況は、前年・平年並みと考えられる。

\*好適水温帯面積：東シナ海の着底稚魚調査結果の解析に基づく計算海域における表層水温18～22℃の面積。

## (2) マサバ

例年、4月～9月期はマサバの盛漁期にあたらないため、漁獲は低調に推移すると考えられる。沖合域、沿岸域とも、前半は1・2歳魚（豆・小銘柄）が漁獲の主体で、後半には0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。平年並みだった11月～2月の漁況や資源評価結果から判断すると、2019年級群の豊度は2018年級群を下回り、2020年級群の豊度は2019年級群を上回ると考えられる。2021年級群の豊度を予測するのは困難であるが、資源評価における2021年の親魚量は微増と予測されるため、2020年級群並みと見積もるのが妥当であろう。0～2歳魚が漁獲の主体であることから、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

沖合域の漁況は、来遊量が前年並みであることから判断して、前年並みと考えられる。また沿岸域の漁況は、11月～2月および直近の漁獲状況から判断して、好調だった前年を下回り、平年並みと考えられる。

## (3) ゴマサバ

例年、4月～9月期には沖合域では1・2歳魚（豆・小銘柄）が漁獲の主体で、0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。また沿岸域では1～3歳魚（小～中銘柄）が漁獲の主体となる。11月～2月の漁況から判断すると、2019年級群の豊度は2018年級群並みで、2020年級群の豊度は2019年級群を上回ると考えられる。2021年級群の豊度を予測するのは困難であるが、資源評価における2021年の親魚量は微減と予測されるため、2020年級群並みと見積もるのが妥当であろう。これらから、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

沖合域の漁況は、来遊量が前年並みであることを反映して、前年並みと考えられる。また沿岸域の漁況は、過去の知見から資源量の変動傾向に準ずると考えられるため、前年・平年を下回ると考えられる。

## (4) マイワシ

例年、4月～9月期の前半は1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が、後半は0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主に漁獲される。産卵調査や漁況の経過等から、2019年級群の豊度は2018年級群よりも低いが、2020年級群の豊度は2019年級群よりも高いと考えられる。2021年級群の豊度を予測するのは困難であるが、直近の漁況では日本海西部沿岸域に1歳魚以上の来遊が確認されていることに加えて、九州西岸へも1歳魚以上の来遊が若干あることから、2021年級群の豊度は2020年級群と同等かそれより大きい可能性がある。西海ブロックにおける近年の漁獲の主体が0・1歳魚であることを考慮すると、来遊量は比較的多かった前年並みで、平年を上回ると考えられる。

## (5) ウルメイワシ

例年、4月～9月期の前半は1・2歳魚（中羽・大羽銘柄）が、後半に0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主に漁獲される。これまでの漁況等から、2020年級群の豊度は2019年級群並みと考えられる。2021年級群の豊度を現時点で予測するのは困難であるが、豊度の多寡に関係する特段の情報は得られていないため、2021年級群は2020年級群と同程度とみなすのが妥当であろう。全体の来遊量は少なかった前年並みで、平年を下回ると考えられる。

## (6) カタクチイワシ

例年、4月～9月期の前半は0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）が、後半は0歳魚（カエリ・小羽・中羽銘柄）が主体に1歳魚（大羽銘柄）も混じって漁獲される。5月～9月の漁況等から、2020年級群の春季発生群の豊度は2019年級群の春季発生群並み、10月～1月の漁況等から2020年級群の秋季発生群の豊度は2019年級群の秋季発生群の豊度と同等かそれより大きいと考えられる。2021年級群の春季発生群の豊度を予測するのは困難であるが、2020年級群の春季発生群と同程度とみなせば、0・1歳の豊度は前年並みか上回ると考えられる。直近の漁況も合わせて判断すると、来遊量は不漁だった前年を上回り、平年並みと考えられる。



表1. 沿岸域の漁況経過（2020年11月～2021年1月）

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口県	中型まき網漁業の漁獲量は200トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比291%、平年比85%）。	中型まき網漁業の漁獲量は28トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比92%、平年比18%）。	
福岡県	代表港中型まき網の漁獲量は84トンで、前年比406%、平年比157%と好漁であった。漁獲の33%を豆銘柄が、64%を中銘柄が占めた。棒受網での漁獲はなかった。小型定置網の漁獲量は5トンで、前年比39%、平年比56%であった。	代表港中型まき網の漁獲量は36トンで、前年比389%、平年比124%でやや好漁であった。漁獲の63%を豆銘柄が、31%を中銘柄が占めた。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網の漁獲量は91トンで、前年比2,183%、平年比453%と好漁であった。
佐賀県	漁獲量は44トンで、前年・平年を下回った（前年比46%、平年比38%）。	漁獲量は14トンで、前年・平年を下回った（前年比78%、平年比52%）。	
長崎県	地域により差があるが、前年並みで、平年を上回った（前年比110%、平年比143%）。	地域により差があるが、前年・平年並みであった（前年比115%、平年比95%）。	
熊本県	漁獲量は65トンで、前年比489%、平年比85%であった。	漁獲量は538トンで、前年比270%、平年比139%であった。	
鹿児島県	主要4港のまき網の漁獲量は1,127トンで、前年・平年を上回った（前年比222%、平年比180%）。	枕崎漁港のまき網の漁獲量は1,174トンで、前年・平年を上回った（前年比158%、平年比186%）。	枕崎漁港のまき網の漁獲量は1,291トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比129%、平年比68%）。

注：「前年」は2019年11月～2020年1月、「平年」は過去5年の平均値。

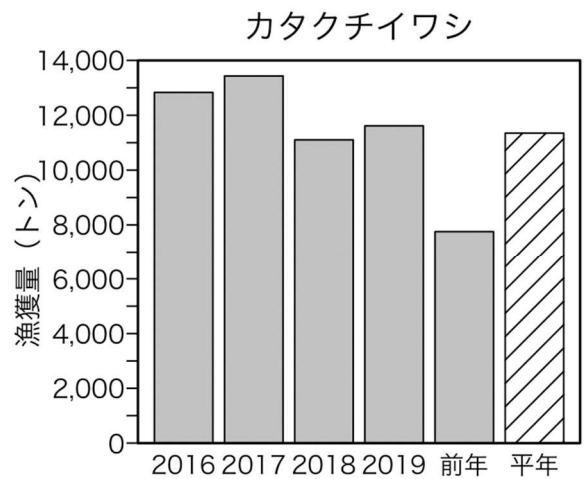
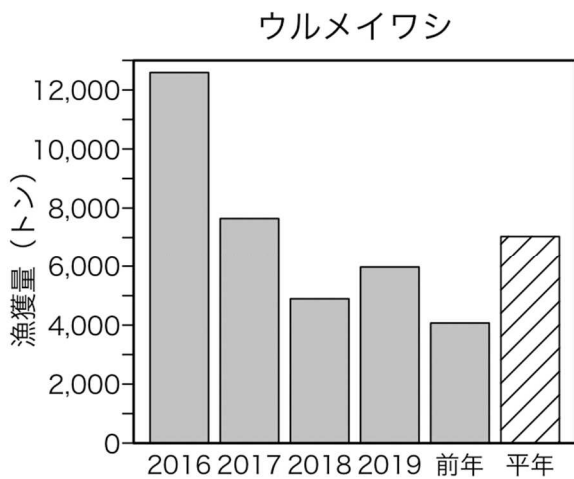
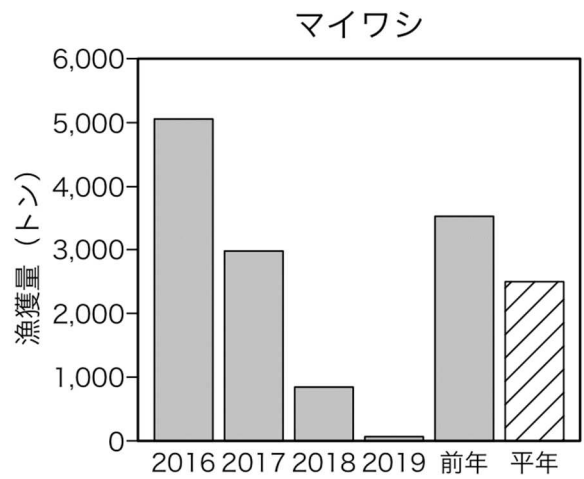
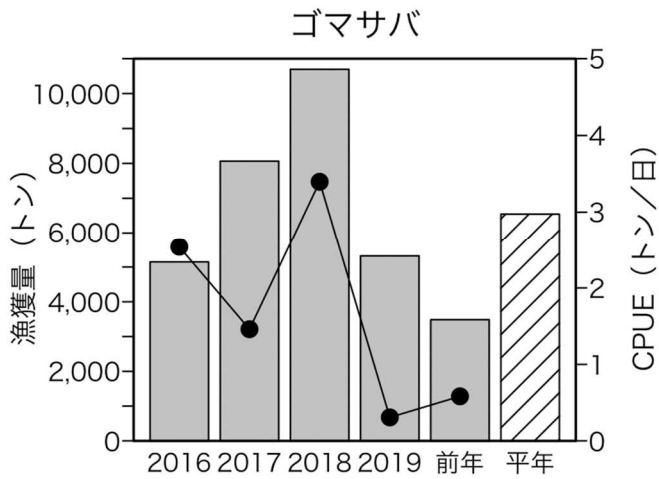
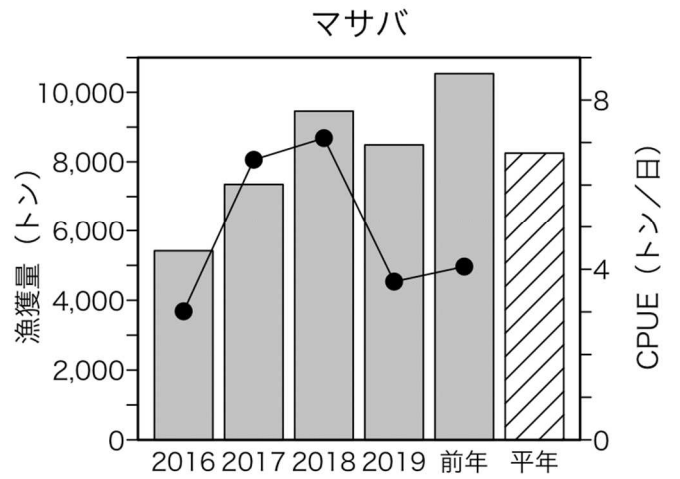
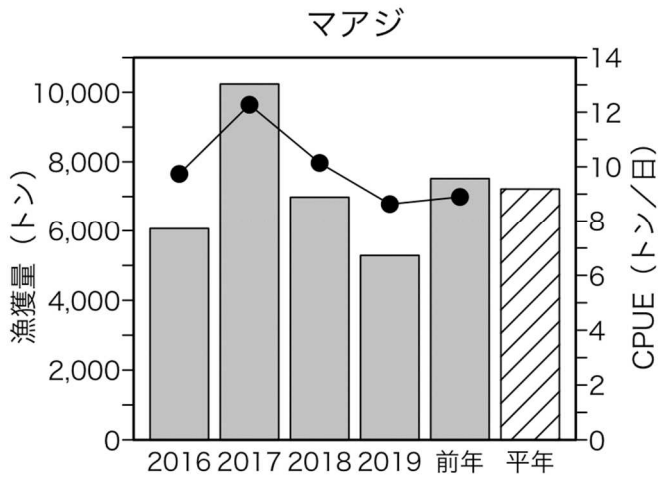
山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。

表1. 沿岸域の漁況経過（2020年11月～2021年1月）続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口県	中型まき網漁業、棒受網・すくい網漁業では漁獲されなかった。	棒受網・すくい網漁業の漁獲はなかった。	棒受網・すくい網漁業の漁獲量は157トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比109%、平年比60%）。
福岡県	代表港中型まき網の漁獲量は僅かで、棒受網での漁獲もなかった。	代表港中型まき網の漁獲量は1トンで、前年比17%、平年比74%とやや不漁であった。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網での漁獲はなかった。棒受網の漁獲量は25トンで、前年比71%、平年比117%であった。
佐賀県	漁獲量は8トンで、前年・平年を上回った（前年比892%、平年比1,642%）。	漁獲はなく、前年・平年を下回った（前年比0%、平年比0%）。	漁獲量は22トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比836%、平年比73%）。
長崎県	地域により差があるが、前年・平年を上回った（前年比568%、平年比172%）。	地域により差があるが、前年・平年を下回った（前年比77%、平年比27%）。	地域により差があるが、前年・平年並みであった（前年比99%、平年比81%）。
熊本県	漁獲量は123トンで、平年比は81%であった。※前年は漁獲がないため比較できず。	漁獲量は75トンで、前年比47%、平年比11%であった。	漁獲量は65トンで、前年比38%、平年比17%であった。
鹿児島県	主要4港のまき網の漁獲量は585トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比194,945%、平年比53%）。北薩海域の棒受網の漁獲量は84トンで、前年・平年を上回った（平年比1,267%）。※前年は漁獲がないため比較できず。	主要4港のまき網の漁獲量は489トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比176%、平年比26%）。北薩海域の棒受網の漁獲量は55トンで、前年・平年を下回った（前年比57%、平年比25%）。	主要4港のまき網の漁獲量は181トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比8,627%、平年比40%）。北薩海域の棒受網の漁獲量は47トンで、前年・平年並みであった（前年比99%、平年比113%）。

注：「前年」は2019年11月～2020年1月、「平年」は過去5年の平均値。

山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。



#### 今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量（沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ）と大中まき網の1日当たりの漁獲量（沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE）。沿岸漁業の漁獲量は、山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。ただし、マサバは福岡県、鹿児島県（枕崎港・阿久根港）のマサバ漁獲量とその他の県のさば類漁獲量（ゴマサバを含むが主にマサバ）の合計値。ゴマサバは福岡県と鹿児島県（枕崎港・阿久根港）のゴマサバ漁獲量の合計値。4月～9月。平年は過去5年平均。

## 参 画 機 関

山口県水産研究センター	鹿児島県水産技術開発センター
福岡県水産海洋技術センター	沖縄県水産海洋技術センター
佐賀県玄海水産振興センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
長崎県総合水産試験場	(取りまとめ機関)
熊本県水産研究センター	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所